

集会
ネット
友友
発表
交流
報告

看取りと家族とのつながり

萩原グループホームちあき

介護福祉士 南波 加奈子・春田 実咲

この取り組みは、利用者のMさんの看取りを意識しはじめた時に、本人が望むことは何だろうと考えたことから始まりました。Mさんは普段から「帰りたい」とよく話していて、自宅へ戻れないかと考えました。

萩原グループホームでは、利用者さんと家族を交えて誕生日ミーティングをしています。Mさんもミーティング時に自宅



自宅に戻ったMさん。娘さんと

熱中症にご注意
ください!!

こまめな水分補給を



外出は帽子で

周囲に声かけ

無理せず冷房

気温や湿度が高い日は、熱中症の危険が高まります。熱中症は気付かないうちに体調を悪化させ、重症化すると命にかかわることもあります。特に高齢者は、暑さを感じにくくなり、熱中症に気づきにくいので、注意が必要です。「自分は大丈夫」と思わず対策をしましょう。

喉の渇きを感じなくても、定期的な水分・塩分補給が大切です。また、室内でも油断せず、エアコンや扇風機を活用した室温管理、涼しい服装を心掛けましょう。少しでも体調に異変を感じたら、無理をせず涼しい場所で休みましょう。

意識がもうろうとしている、呼びかけに反応しない、吐き気強いなどの重い症状がある場合は、すぐに救急車を呼んでください。

千秋病院 外来 看護師 松原 史江



戦争体験を語る松下さん



ボランティアによるガイド

しました。その後も生活されていた自宅で、家族との時間を過ごすことが実現できました。

自宅へ戻って1カ月後、本格的に看取りケアが始まりました。Mさんの状態に合わせて家族・主治医と連携して、望むケアに取り組みしました。亡くなる2日前、娘さんとの2人の時間を過ごせるのはこのタイミングと判断して連絡し、1時間

事務委員会フィールドワーク企画
事務系職員が平和の尊さを学ぶ

5月31日、事務委員会「今を戦前と呼ばせなうー」をテーマに、名古屋市名東区のピースあいちでフィールドワーク企画を実施しました。事務委員会としては初めての外部施設へ出向く企画で

松下哲子さんによる戦争体験の語りでは、満州での暮らしから引き揚げ時の様子を聞きました。ボロボロになった開拓団の方が次々亡くなられていく様子が語られ、「人間が数でしか表されないのが戦争であり、二度と同じ思いをしたくない」という言葉が強く印象に残っています。10年に一度戦争をしてきた日本が

ほど2人で過ごすこともできました。

娘さんから後で聞いた話では、最後の思いや感謝を伝え、その時にMさんは涙を流したそうです。亡くなったのはその翌日で、思いを伝えるには本当に良いタイミングでした。看取りケアを通して家族と関わり合え、信頼関係を築き、つながりを持てたことがとても良かったと思います。

戦争をしてこなかったこの80年がいかに貴重か、今後戦争しない国でいるためには私たちの力が必要不可欠であることを再認識しました。

施設見学では、愛知県での空襲についてボランティアの方に解説してもらいました。耳なじみのある地名の空爆被害写真もあり、戦争をより身近に感じました。参加者の感想からも、平和の尊さを学ぶいい機会になったようです。今後もこのような企画を継続して開催していきたいです。

介護サービスク推進課

谷口 薫

ドクター・ナース・介護ウエーブ

5月10日、安全・安心の医療と介護の実現を目指して、「ドクター・ナース・介護ウエーブ」が名古屋市中東区の栄公園で開催されました。尾張健康友会からの参加者の声を紹介します。

A2病棟 看護師

寺澤 詩子

多くの人でにぎわう名古屋栄を、看護師の処遇改善や職員増員を訴えながらパレードしました。道行く人々が足を止めて私たちの声を聞いてくれたので、医療の現状を社会に広く訴えることができた。なんと改めて感じました。

B2病棟 准看護師

山中 希美

今回の活動を通して、それぞれの職場で働く方々の意見を聞きまし

た。業務をこなすことに精一杯で、心のこもった看護ができない、本来の業務以外に時間をとられしてしまう、慢性的に人手が足りないなど、どの現場でも同じような訴えが多かったです。

B3病棟 看護師

前田 佳穂

医療、介護現場は人手不足・過重労働などが続いています。職員・利用者さんともに安心できるケア体制を築くために、処遇の向上や介護保険制度の見直しを求めていく必要もあります。現



状を市民の方たちにも直接伝え、少しでも変えていくためにとても大切な活動だと実感しました。

ケアハウスちあき
社会福祉士

桑原 友

高校生くらいの子が「何の署名をしてるんですか」と声をかけてくれました。しかし、署名呼びかけの事前の準備を満足にできなかった私には、要領よく説明するすべがありませんでした。国や社会に対してものを訴える側として参加するのであれば、事前学習が必要だと痛感しました。

デイサービスちあき
介護福祉士

山田 哲矢

「もつとゆつくり利用者さんと接する時間がほしい」と思います。どの現場も時間に追われ、生

産性を求められる中で業務は作業になり、人と人がつながる心のこもった介助ではなくなっています。心のこもった介護が実践できるようになってほしいと思いました。

病院デイケア
介護福祉士

鹽野 千聡

署名活動で、私たち現場の人間は身近に思える問題だが、世間の人たちはどこか他人事であり危機感がないように感じました。いかにこの問題を身近なものとして捉えてもらうか、一般の人でも分かりやすい言葉で伝えて少しでも耳を傾けてもらうような呼びかけ方が必要だと思いました。

老健デイケア
介護福祉士

石井 とも子

デモ行進は訴える内容が限定されていたことで、声を上げやすくなっていました。ただ、やはり参加人数が少ないことで、せっかくの活動もインパクトが小さくなってしまっていると感じました。参加できる余裕がないことの表れだと思いますが、改善が必要です。全国各地で看護の日に合わせてこの活動が行なわれています。多くの方に少しでも声が届いていることを願います。